

# 学習困難を抱える児童に ICT 学習支援ツールを使用することに関する態度 ー特別支援教育に関するイラショナル・ビリーフとの関連に着目してー

人間教育専攻

臨床心理士養成コース

指導教員 小倉正義

辻 歩実

## 1. 問題と目的

文部科学省(2012)の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」では、知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合は 6.5%で、そのうち学習面で著しい困難を示す児童生徒の割合は 4.5%であると示されている。このような学習困難を持つ児童生徒への支援ツールの一つとしてデジタル教材・デジタル教科書などの ICT (情報通信技術:Information and Communication Technology) 学習支援ツールがあげられる。

ところで 2006 年 12 月に障害者権利条約が採択され、世界的にインクルーシブ教育を推進する流れが明白となった。その流れの中で、文部科学省(2010)は障害特性を踏めた指導や支援を通常学級の中で行う必要があると合理的配慮の例をあげ説明している。この例の中で学習に困難を示す児童生徒に、ICT 学習支援ツールを使用することは、合理的配慮の一つとして認められる。しかし、合理的配慮として児童生徒が ICT 学習支援ツールの使用を学校側に対し申請したとして、それが許可されていない例も存在する(近藤,2016)。このように合理的配慮が適切になされていない一つの要因として、教員のイラショナル・ビリーフに着目した(羽鳥・小玉,2003)。

本研究では、特別支援教育に関するイラシ

ョナル・ビリーフを持つ者は、特別支援教育における ICT 学習支援ツールの活用に対する態度が消極的になると仮説を立て、検証を行なった。

## 2. 方法

(1)調査協力者:X 大学の教職志望の大学院生、教職経験のある大学院生、心理学系専攻の大学院生(女性 61 名、男性 45 名、不明 2 名)を分析対象とした。

(2)調査時期:2019 年 10 月

(3)質問紙の構成:①フェイスシート(年齢・性別・勤続年数、教職年数・大学院の専攻・教職経験の有無・支援員やボランティアで学校現場に携わった経験の有無を尋ねた)、②ICT 操作苦手意識(14 項目)、③特別支援教育に関するフェイスシート(教職経験のある調査協力者に対して、障害児を担当した経験の有無・勤続経験の有無・ICT 学習支援ツールを使用した経験の有無・マルチメディア DAISY の知識・音声教材 BEAM の知識を尋ねた)、④特別支援教育に関する ICT 学習支援ツール活用態度(29 項目)、⑤特別支援教育に関するイラショナルビリーフ(12 項目)

(4)調査手続き:調査協力依頼の文書と質問紙を大学内で配布し、回答を依頼した。

## 3. 結果と考察

(1)特別支援教育に関する ICT 学習支援ツールについて:教職経験の有無で ICT 学習支援ツ

ルの認知度, ICT 学習支援ツールの使用経験, マルチメディア DAISY の認知度, 音声教材 BEAM の認知度について  $\chi^2$ 検定を行ったところ, ICT 学習支援ツールの認知度 ( $\chi^2=26.08, df=3, p=.000$ ) と使用経験 ( $\chi^2=17.24, df=1, p=.000$ ) については教職経験の有る者の方が有意に高かった。

(2)尺度の検討:各尺度の検討のため, 因子分析を行った。その結果, ICT 操作苦手意識尺度では「操作苦手意識」の1因子, 特別支援教育に関する ICT 学習支援ツール活用態度尺度では「ICT 学習支援ツール活用への肯定的評価」「ICT 学習支援ツールの教育効果に対する懐疑」「ICT 学習支援ツールの使用に対する不平等感」の3因子, 特別支援教育に関するイラショナル・ビリーフでは「知識・経験への偏重」と「特別視への抵抗」の2因子がそれぞれ抽出され,  $\alpha$ 係数を求めたところ, 十分な内的整合性が示された。

(3)教職経験の有無による各尺度の平均値の比較:教職経験の有無による各因子の平均値の比較のため,  $t$ 検定を行った。その結果, 「特別視への抵抗」は有意な差が見られ, 教職経験の無い者の方が教職経験の有る者より特別視への抵抗が強いことが示された。

#### (4)各尺度間の関連

各尺度の関連を検討するため, Pearson の相関係数を求めた。その結果, ICT 苦手意識尺度と ICT ツール活用の教育効果に対する懐疑 ( $r=.340, p=.000$ ), ICT 学習支援ツールの使用に対する不平等感 ( $r=.316, p=.001$ ) とに有意な正の相関があった。ICT 学習支援ツールの使用に対する不平等感は, 知識・経験への偏重 ( $r=.370, p=.000$ ), 特別視への抵抗 ( $r=.359, p=.000$ ) と有意な正の相関があった。知識・経験

への偏重は特別視への抵抗と有意な正の相関があった ( $r=.578, p=.000$ )。このことから, ICT 操作苦手意識と特別支援教育に関する ICT 学習支援ツール活用態度の消極性に関連があると認められた。さらに, ICT 苦手意識を調整変数として, 特別支援教育に関する ICT 学習支援ツール活用態度と, 特別支援教育に関するイラショナル・ビリーフに関連が見られるか偏相関を用いて検討したところ, ICT 学習支援ツールの使用に対する不平等感と, 知識・経験への偏重 ( $r=.334, p=.001$ ) と, 特別視への抵抗 ( $r=.393, p=.000$ ) との間みに有意な正の相関が認められた。このことから, ICT 学習支援ツールの使用に対する不平等感を持つ者は特別支援教育に関するイラショナル・ビリーフを持つことが明らかになり, 仮説は一部支持された。

#### 4. 今後の課題と展望

まず, 本研究は一部の地域の大学院生を対象とした調査である為, 結果を安易に一般化することはできないと考えられる。今後, 多様な調査協力者を得て検討することが必要である。次に, ICT 学習支援ツール活用態度の消極性に影響を与える要因が他に存在する可能性も示唆され, 今後検討が必要である。さらに, 具体的な支援につなげるためにはまだ情報が不足している。そのため, 教員が ICT 学習支援ツールに対する積極性を獲得した経緯を明らかにし, 適切な活用促進のための介入を検討することが必要である。